



Data

監督：武正晴
 脚本：足立紳、今井雅子
 出演：中井貴一／佐々木蔵之介／友
 近／野田誠治／森川葵／堀
 内敬子／坂田利夫／木下ほ
 うか／塚地武雅／桂雀々／
 寺田豊／芦屋小雁／近藤正
 臣／

👁️👁️ みどころ

「潜水艦モノ」や「密室モノ」も面白いが、「詐欺師モノ」も面白い。『T. R. Y.』（02年）や『クヒオ大佐』（09年）に続いて、それを実証した（？）のが本作だ。

中井貴一は本来『壬生義士伝』（02年）の端正な役がハマリ役だが、意外に詐欺師もピッタリ。逆に、うだつのあがらない詐欺職人がピッタリの俳優・佐々木蔵之介との相性は・・・？

適正な商売と詐欺との線引きは？個人プレーと総合力・グループ力を備えた詐欺師集団との優劣は？そんな「論点」も踏まえて、一攫千金の一億円（プラス消費税）を目指す一大プロジェクトに挑戦！

もっとも、それに大勝利した後は、一難去ってまた一難・・・？



■□■「密室モノ」も面白いが「詐欺師モノ」も面白い！■□■

「潜水艦モノ」や「列車モノ」という「密室モノ」が面白いのは当然だが、「詐欺師モノ」も面白い。『Uボート 最後の決断』（03年）（『シネマールーム7』60頁参照）、『Uボート（ディレクターズ・カット版）』（97年）（『シネマールーム16』304頁参照）や、馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『イノセントワールド—天下無賊—』（04年）（『シネマールーム17』294頁参照）、ポン・ジュノ監督の『スノーピアサー』（13年）（『シネマールーム32』234頁参照）等を観れば前者がよくわかるし、『T. R. Y.』（02年）（『シネマールーム2』217頁参照）や『クヒオ大佐』（09年）（『シネマールーム23』202頁参照）等を観れば後者がよくわかる。そして、大阪の堺を舞台にした「詐欺師モノ」

である本作を観れば、ますますそれに納得！

年を取ってもなお若い時の端正さが変わらない俳優・中井貴一は、本来『壬生義士伝』（02年）のようなシリアスな役がピッタリ（『シネマルーム2』71頁参照）だが、本作のような「お笑い芸人」顔負けの詐欺師の役でも、しっかりその役割を果たすことができる。他方、冒頭は「騙し騙され」の関係が始まりながら、本筋では中井貴一扮する詐欺師の強力なパートナーになる、売れない陶芸家・野田佐輔を演じる佐々木蔵之介はもともと何でもござれの万能役者。

そんな2人がタッグを組んだ「詐欺師モノ」が面白いのは当然！

■□■詐欺と商売の「線引き」は？小池の「目利き力」は？■□■

近代都市法の核になったのは、1968年の「新都市計画法」の制定だが、その新都市計画法の特徴の一つが「線引き」。これは、都市計画区域について地図上に線を引いて市街化区域と市街化調整区域を区分し、その法的効果を明確に区別する制度だ。小池則夫（中井貴一）は一人娘の大原いまり（森川葵）を助手として古物商を営んでいたが、骨董品の取引では「目利き」が何よりも大切。しかし、他方で、骨董品の取引では「お宝の鑑定」という重要な作業もあるから、いかにやり手の小池であっても、骨董店・樋渡開花堂を営む社長の樋渡（芦屋小雁）や、この社長とべったり組んでいる鑑定士の大御所である棚橋（近藤正臣）には、今なお頭が上らないようだ。

モノを安く仕入れ、それに経費や利益を上乗せして高く売るのが商売の基本だが、価値や値段のつけ方が難しい骨董商売では、そもそもどこまでが適切な商売なのか、どこからがインチキな詐欺商法なのかの「線引き」が難しい。市街化区域と市街化調整区域の線引きのように明確に線引きできないわけだ。そんな「線引き」の難しい骨董の世界において、小池はかつて樋渡や棚橋にひどい目に合わされたらしいが、さて今回は・・・。

本作冒頭、古い大きな蔵の持ち主らしい男・野田と蔵の中に収まっている大量の骨董品売買の折衝を始めた小池は、蔵の中に千利休直筆の譲り状と幻の千利休の茶器を発見したため絶句！何としてもこれを手に入れようと頑張った小池は、「蔵のもの全部、100万円で引き取りましょう」と申し向け、詐欺商法のようなチョー安値でお宝を手に入れることに成功したかに思えたが、さてその実は・・・？

■□■詐欺も、一人より総合力！グループ力！■□■

平昌冬季五輪では女子スケート、女子カーリング等において、日本選手の個人力もさることながら総合力、グループ力が際立っていた。日本が世界初の金メダルをとったスピードスケート女子チームパシュート（団体追い抜き）の総合力、グループ力はとりわけそうだった。そんな目で本作導入部を観ていると、騙したと思っていた小池が逆に見事に騙されていたのは、野田個人の詐欺力もさることながら、①飲み屋・土竜のマスターで、筆の

名人である西田（木下ほうか）、②阪神タイガースのかつてのバース選手によく似た箱作りの名人である材木屋（宇野祥平）、③表具屋で紙に詳しいよっちゃん（坂田利夫）等との総合力、グループ力によるものが大きいことがわかる。

もちろん、小池は「詐欺の被害にあった」と警察に訴え出ることできるが、そんなことをすれば、小池自身が警察から痛くもない腹を探られる恐れがある。さらに、西田が経営している飲み屋・土竜で、手の内を明かしながら（？）ワイワイ飲んで語っていると、その時間が小池にとってそれなりに楽しかったのは意外だった。また、野田の家に入ると、古女房で一人息子の誠治（前野朋哉）を溺愛している妻・康子（友近）のキャラも意外に面白かった。さらに双方の父親同士が全く想定できなかったのが、いまりと誠治が一目会ったその日から恋の花が咲いたこと。そのため、そそくさと野田の家を出ようとする小池に対して、いまりは「私はこの家に残る！」と宣言したから、アレレ……。しかして、本作中盤のメインストーリーの展開は如何に……？

■□■やられたら、やり返せ！さて、その計画は？■□■

ボクシング等の格闘技でも、囲碁・将棋等の知的ゲームでも、勝負の鉄則はたくさんあるが、その中の一つが「やられたら、やり返せ！」。去る2月17日の第11回朝日杯オープン戦準決勝で藤井聡太5段に敗北した羽生善治七冠は、密かにその闘志を燃やしていることだろう。しかして、本作中盤は、小池が野田をはじめ、西田、材木屋、よっちゃん等の詐欺師のグループ力、総合力、さらには文化庁の文化財部長（桂雀々）、博物館の学芸員・田中（塚地武雅）等の「外野陣」の力を結集して、一敗地にまみれた骨董店・樋渡開花堂の社長、樋渡（芦屋小雁）と大御所鑑定士・棚橋（近藤正臣）に対して仕掛ける、「一億円強奪ミッション」になるので、それに注目！「一億円強奪ミッション」の最初の一步は、野田が利休の「幻の茶器」を焼くための土探しから。土を食べ食べしながら自分本来の仕事に励み始めた野田の姿勢には鬼気迫るものがあつたが、さて茶器の出来は？そして、それを活かした小池の全体構想とグループ統率力は……？

そこで問題になるのが、堺を基盤に活動した千利休の人となりやその功績。そして、彼の茶の湯の本質をどこまで理解できているかということだ。その理解がしっかりしていれば、小池のいかにも説得力のありそうなインチキ説明（？）にも対抗できるだろうし、棚橋鑑定士の博識ぶりにも理解や共感を示すことができる。しかし、それがなければ、基本的に本作の鑑賞については「受け身」にならざるをえない。豊臣秀吉から切腹を命じられるシリアスな千利休の歴史的ストーリーは『利休にたずねよ』（13年）でしっかり勉強する必要がある（『シネマルーム31』181頁参照）が、そもそも本作本筋のテーマになる利休の幻の茶器とは……？詐欺のテクニックの面白さとは別にそんな歴史秘話もしっかり学べば、本作の価値は増大するはずだ。

■□■かけひき、思い込み、錯覚。その展開は如何に??■□■

今年の元旦の夜、私は浜田雅功らが司会する、『芸能人格付けチェック!』を楽しく観た。そこでは、X JAPANのYOSHIKIとGACKTという2人の芸能人のレベルの高さが際立っていた。それに対し、食通を自称する某芸能人たちが、安物のワインvs高級ワイン、高級ステーキvsスーパーのステーキ等の違いを見抜けず、また音楽通を自称する某芸能人たちがストラディバリウスの演奏vs並のバイオリンの演奏の違いを見抜けないうちに、ビックリ!というより、常々そんなものだろうと思っている私は、そんな展開に妙に納得し溜飲をさげたものだ。

しかして、本作のクライマックスは、小池と野田を中心とする詐欺師グループが仕掛けた一大オークションとなる。そこには、一般客はもちろん、流暢な(怪しげな?)日本語を操る謎の外国人ピエール(ブレイク・クロフォード)、博物館学芸員の田中、文化庁文化財部長等々「さくら」(?)の他、多くの骨董プロにまじって、樋渡も棚橋も参加していた。そして、オークション価格はみるみるうちに上昇し、いよいよ一億円の大台に乗ろうとするところまできたが、そこでそれまで積極的にオークションに参加していた棚橋から「ちょっと待て!この茶器はまがいものだ!」との声が出たから、雰囲気は一変することに。これにて万事休す。小池と野田を中心とし詐欺師たちの総合力、グループ力を結集して「一攫千金」を夢見た「お宝コメディ」は、失意のうちにジ・エンドと思われたが・・・。

多分、歴史上の表の舞台はここまで。しかし、実は歴史には裏があり、そこではかけひき、思い込み、錯覚という人間の心理に根差した真の(ウラの?)ストーリーの展開が・・・。

■□■付録は蛇足?それとも世代交代は不可欠?■□■

「詐欺師モノ」のケリのつけ方は難しい。ある意味では「詐欺師モノ」映画最大の傑作ともいえるアラン・ドロン主演の『太陽がいっぱい』(60年)でも、ラストはご存じのとおりでハッピーエンドではなかった。しかし本作では、結果的に小池は一億円に消費税まで上乗せさせたキャッシュを棚橋から受け取ったから万々歳。後は、それを配分するだけだ。しかし、外の敵に対してはグループ力、総合力で戦い大勝利しても、その後の内部分配はスムーズにいくの?そこでは、人間の欲のぶつかり合いが発生し、新たな紛争が発生するのは・・・?

当然そんな予感(心配)があるが、本作は実に想定外の展開でそれを進めていくので、それに注目!社会的にどうしようもなかった「引きこもり男」の息子・誠治が、いまりと恋仲になり、結婚の決意まで固めたのはラッキー!幸い今回の大仕事で大金を手に入れた双方の父親は豪勢なご祝儀をするはずだから、新婚夫婦はそれで豪華な海外への新婚旅行を。なるほど、なるほど・・・。ストーリー上では一見、ハッピーエンドの上にさらなるハッピーエンドを重ねるそんな展開が続いていくが、実はそのウラには・・・?

今や日本の中小企業の多くは後継者不足で事業を廃止しなければならない状況に陥っているが、それは詐欺師も同じ。小池も野田も後継者不足（ナシ？）で悩んでいたはずだが、本作のあつと驚くラストのドタバタ劇を見ると、なるほどこれもあり？もともと、そんな結末のつけ方には当然賛否両論が・・・。

2018（平成30）年3月5日記